

Eureka XII

六年制通信 No.38 令和7年2月14日(金)号

物来順応

君たちは覚えているでしょうか。何年前のことかは忘れましたが、社会の教科書から坂本龍馬に関する記述を削除しようとする動きがあったのです。しかし高知の人

(龍馬の出身である土佐の人だね)を筆頭に我らが龍馬を消すとはけしからんという運動もあり、現在は元に戻っているようです。私たちは何となく薩長同盟は坂本龍馬一人の仕事のように思っていますが、歴史家からすると明治維新において龍馬の果たす役割は何も歴史の教科書で西郷隆盛レベルの扱いをするほどのものではないと、そういうことらしいですね。これ、つまり、考えるに、私たちが坂本龍馬に持つイメージが史実としては相当正しくないらしいということですよ。しかし一種異様なほどに私たちは龍馬に親しみを感じているのも事実ですよ。私たちの中に作られた龍馬像は、恐らく司馬遼太郎の『竜馬がゆく』の中の龍馬だと思うのですが、どうでしょう。私はあの本にあるイメージが私の龍馬像だとはっきりと自覚できます。考えてみると作品と言いますか作家と言いますか、その影響力というのは恐ろしいものです。

『竜馬がゆく』や小説日露戦争と言われた『坂の上の雲』も大衆小説なのであり、史実に基づきながらも司馬さんの創作も入っているわけです。そういうのは人物の好き嫌いによく出ています。司馬さんは乃木希典をはっきり愚将扱いしていますね。私は乃木さんは立派な人物だったと思っていますので、司馬さんの乃木像には違和感がありますね。作家の力で言えば、私の中の米内光政像は阿川弘之の『米内光政』で作られています。補強としては高田万亀子の『静かなる盾』ですね。このお二人のおかげで私は米内さんを尊敬しています。『米内光政』に米内さんの言葉として書かれているものはやはり印象に残っていて、生徒諸君に例えば体育祭の鉢巻きなどに何か書いてくださいと頼まれると米内さんの「笑中有力」を勝手に使うこともあります。

東京裁判における広田弘毅の態度を立派に思い、軍人ではなく文官としてただ一人処刑されることに激しい怒りを覚えるのも間違いなく城山三郎の『落日燃ゆ』の広田像に影響を受けているのだと自覚しています。のちの宰相吉田茂と同期だった外交官広田は誰よりも早く出世して外務大臣となり、軍部と渡り合う英雄のように『落日燃ゆ』では描かれているわけですが、史実は私にはわかりません。小説は小説ですからね。しかし、だからこそ登場人物が魅力的に描かれているわけです。ただ、史実として、東京裁判で「処罰を逃れるための弁明はしない。自分が高位の官職にあった時の出来事に私は責任をとる」と言ったことに私は深く感銘を受けています。米内さんも同じような発想をする人物ですね。余談ですが、立派な男に憧れる気質が自分にある

事を、こういう本に惹かれることで理解できます。何に魅力を感じるかは人によって違います。そしてそれが自分の個性というものです。

「物来順応」は広田が好んで揮毫した言葉です。「ぶつらいじゅんのう」と読むでしょう。意味は字のごとく「物事が来ればそれに順応する」ということです。『落日燃ゆ』では広田の性格がよくわかるようなエピソードがたくさんありますが、彼の好んだ言葉も性格をよく表していますね。「自ら計らわない」とか「風車、風の吹くまで昼寝かな」も「物来順応」に通じる言葉です。奸計を用いてはかりごとをするのを嫌っていたことがよくわかります。風車を無理に回すのではなく、風が吹くまで待つ。ただ、好むと好まざるとにかかわらず必ず風は吹く。その時、真摯にそれに向き合う、きっと広田はそう考えていたに違いないでしょう。そうでなければ座右の銘に「物来順応」を選ぶはずがないですからね。広田と二歳違いの米内さんも、水晶のような人で智謀を弄するような人ではなかったと言います。似てますよね、お二人。

今週のおすすめ

・三浦しをん 『風が強く吹いている』 （新潮文庫）

三浦さんは私の大好きな『舟を編む』の作者ですから、他にも何冊か読んでいます。勝手に思っていたのですが、今回が三浦さんの本としては二作目なものでした。

箱根駅伝に挑むたった十人の陸上部員たちの物語です。しかもほとんどが幽霊部員で、全く練習はしていません。清瀬灰二（ハイジ）が蔵原走（カケル）と出会うところから物語は始まります。灰二は走の天性のスピードを見抜き、なかば強引に竹青荘に入寮させます。ここは寛政大学の陸上部の寮。走が入ってようやく十人。箱根を走るための最低人数が揃ったわけ。そこで灰二が高らかに宣言。みんなで箱根駅伝に出るぞ、と。ニコチン中毒の留年生、漫画にしか興味のない王子、司法試験に合格している剣道経験者、高校でサッカーをしていた双子、クイズ王などなど、個性豊かな寮生たちは全員驚いて大反対。当然ですよ。しかし誰もが何かにつけて灰二に世話になっており、灰二の言うことに逆らにくい状況にもある。仕方ない、一年だけやるか、というわけで苦しい練習が始まり…。走るとはどういうことか、その答えを求めて走る走る走る。彼らはそれぞれの事情を抱えながら箱根を目指し、それぞれの青春を燃やしていきます。襷をつなぐ意味を知っていく彼らの姿が胸を打ちます。大学駅伝の監督から見れば、これはあり得ない夢物語なのかどうか私には判断が付きませんが、実際どこかの大学で夢を追いかけている若者たちがいてほしいとも思います。私は映画を先に観ました。それから小説を手にとったのですが、いつものように映像は活字の想像力には勝てないのだろうと思いながら読んでみると、なかなか映画もよかったと思いましたよ。竹青荘の映像は想像以上にリアルでしたしね。

私はこの小説で、言葉の持つ力を改めて感じました。苦しい時、迷った時、目標がわからなくなった時、誰もが言葉にすがることにも再確認ができました。人は的確な言葉を求めるのです。何のことか知りたくなかった人は是非小説を読んでみて下さい。

BGMは 中島みゆきの 時代 でした…。